

厚生省精神・神経疾患研究委託費

筋ジストロフィーの療養と看護に
関する臨床的, 社会学的研究

平成5年度研究成果報告書

平成6年3月

主任研究者 岩下 宏 (国立療養所筑後病院)

目 次

筋ジストロフィーの療養と看護に関する臨床的、社会学的研究.....	17
主任研究者 岩 下 宏	
「入院療養・看護」のまとめ	20
国立療養所南九州病院 福 永 秀 敏	
「在宅療養・看護」のまとめ	22
国立療養所刀根山病院 姜 進	
「栄養・体力」のまとめ	24
弘前大学医学部 木 村 恒	
「QOL」のまとめ	26
国立療養所宇多野病院 河 合 逸 雄	
「リハビリ I (理学・作業療法)」のまとめ	28
国立療養所徳島病院 松 家 豊	
「リハビリ II (機器)」のまとめ.....	30
国立療養所西多賀病院 服 部 彰	
「病態・その他」のまとめ	32
国立療養所筑後病院 岩 下 宏	
入院療養・看護	
NIPPVの導入にあたって -しおり・ビデオ作成-	33
国立療養所再春荘病院 直 江 弘 昭 ・ 桝 原 聡 子 ・ 野 田 須 恵 子	
有 水 モモヨ ・ 斎 藤 千 秋 ・ 本 田 リ カ	
船 本 幸 一 郎 ・ 松 村 幸 子	
NIPPVの有用性とQOLを考える -意識調査を通して-	36
国立療養所川棚病院 洪 谷 統 寿 ・ 吉 川 恵 子 ・ 原 康 廣	
山 下 洋 子 ・ 野 口 良 子 ・ 長 下 し ず え	
安 永 勝 子	
DMDにおける夜間NIPPVの適応について	38
国立療養所八雲病院 南 良 二 ・ 石 川 悠 加 ・ 石 川 幸 辰	
住 谷 晋 ・ 松 谷 学	
鼻プラグ (ADAM CIRCUITS) によるNIPPV	43
国立療養所八雲病院 南 良 二 ・ 前 田 淑 恵 ・ 末 部 奈 美 子	
柴 田 明 美 ・ 野 口 房 子 ・ 石 川 幸 辰	

気管切開下IPPVからNIPPVへ移行したDMD患者の看護	45
国立療養所八雲病院	南 良 二 ・ 板 垣 道 子 ・ 佐々木 盛 夫 大 野 雪 二 ・ 若 林 裕 子 ・ 斎 藤 弘 子 柴 田 明 美 ・ 加 我 麻 有 美 ・ 野 口 房 子 石 川 幸 辰
NIPPVの鼻マスクによる皮膚トラブルの改善を試みて	48
国立療養所西多賀病院	服 部 彰 ・ 高 橋 益 子 ・ 照 井 洋 子 佐 藤 紘 子 ・ 鈴 木 徳 子 ・ 佐々木 俊 明
鼻根部の褥瘡対策 ―歯科用印象材を使用して―	52
国立療養所鈴鹿病院	高 井 輝 雄 ・ 河 井 ひろ江 ・ 多 田 由 美 林 幸 弘 ・ 坂 部 ひろみ ・ 小 野 妙 子
過去9年間の人工呼吸器装着患者の動向と今後の課題	54
国立療養所下志津病院	川 井 充 ・ 町 野 次 子 ・ 金 子 和 子 大 出 誠 司 ・ 今 村 つ る ・ 中 里 節 子 佐 藤 節 子 ・ 折 田 早 苗 ・ 小 原 志 保 美 土 佐 千 秋
体外式人工呼吸器装着患者のQOLを考える ―生活行動範囲の拡大を試みて―	57
国立療養所東埼玉病院	川 城 丈 夫 ・ 中 里 あ い ・ 宮 田 トミ子 田 村 ユミ子 ・ 神 田 由 香 ・ 水 落 幸 子 清 野 きみえ ・ 渡 辺 仁 美 ・ 高 島 淳 子 小 澤 民 子
PMD呼吸不全に対する体外式人工呼吸の長期追跡について	59
国立療養所徳島病院	松 家 豊 ・ 位 頭 廣 子 ・ 板 東 君 江 武 田 純 子
人工呼吸管理となったPMD患者に対するパソコン導入について	62
国立療養所徳島病院	松 家 豊 ・ 山 下 大 作 ・ 小 倉 一 郎 片 山 秀 史 ・ 位 頭 廣 子 ・ 櫻 井 一 子 飯 尾 能 里 枝
エマーソンチェストレスピレーター33を使用して ―エマーソンCRからCR-33に変更し延命している症例―	65
国立療養所東埼玉病院	川 城 丈 夫 ・ 千 葉 幹 子 ・ 宮 崎 宣 子 大 田 道 子 ・ 井 之 上 律 子 ・ 中 島 実 坂 卷 京 子 ・ 荻 田 国 代 ・ 山 崎 チ イ
呼吸不全終末期患者の日常生活を考える ―病棟日課の見直し―	68
国立療養所東埼玉病院	川 城 丈 夫 ・ 沖 村 悦 子 ・ 杉 浦 亜 希 子 栗 田 順 子 ・ 池 田 敦 子 ・ 山 本 みよ子 島 村 寛 子 ・ 澤 田 田 鶴 子 ・ 高 橋 シヅエ

呼吸不全発症以前に肺梗塞により死亡したと思われる Duchenne 型筋ジストロフィーの 1 例	70
1) 国立療養所東埼玉病院	川 城 丈 夫 ¹⁾ · 野 崎 博 之 ¹⁾ · 川 村 潤 ¹⁾
2) 川崎市立川崎病院検査科	石 原 傳 幸 ¹⁾ · 佐々木 一 哉 ¹⁾ · 福 田 純 也 ²⁾
筋緊張性ジストロフィーのターミナルケア (その 3) -呼吸不全Ⅱ・Ⅲ期の看護-	73
国立療養所松江病院	武 田 弘 · 竹 下 孝 子 · 布 施 道 代 梶 原 志 津 子 · 高 尾 泉 · 廣 田 真 弓
筋緊張性ジストロフィー患者の呼吸障害についての検討 -嚥下障害との関係について-	75
国立療養所道川病院	斎 藤 浩 太 郎 · 今 野 美 貴 子 · 高 橋 級 子 村 井 明 美 · 佐々木 周 子 · 柴 田 み え 子 佐々木 裕 子 · 佐々木 義 憲
筋緊張性ジストロフィー患者の呼吸障害に対するテオフィリンの効果について	78
国立療養所医王病院	本 家 一 也 · 出 雲 外 志 江 · 大 坪 外 美 子 丸 山 稔 之 · 杉 本 由 香 里 · 小 林 美 恵 大 場 和 子 · 橋 本 浩 之 · 奥 村 誠 一
DMD 心機能障害に対する ACE 阻害剤の治療効果 <共同研究>	81
1) 国立療養所川棚病院	渋 谷 統 寿 ¹⁾ · 田 村 拓 久 ¹⁾ · 姜 進 ²⁾
2) 国立療養所刀根山病院	福 永 秀 敏 ³⁾ · 石 原 傳 幸 ⁴⁾ · 飯 田 光 男 ⁵⁾
3) 国立療養所南九州病院	
4) 国立療養所東埼玉病院	
5) 国立療養所鈴鹿病院	
DMD 心不全患者における心機能に対する呼吸不全の影響について	86
1) 国立療養所南九州病院	福 永 秀 敏 ¹⁾ · 大 窪 隆 一 ²⁾ · 加 世 田 俊 ¹⁾
2) 鹿児島大学医学部第三内科	岩 城 宏 之 ¹⁾
DMD の心不全に対する ACE 阻害剤と β 遮断薬の併用療法	89
国立療養所八雲病院	南 良 二 · 石 川 悠 加 · 石 川 幸 辰 住 谷 晋 · 松 谷 学
DMD 慢性心不全患者の H Q O L 評価の試み	96
国立療養所八雲病院	南 良 二 · 戸 嶋 宜 子 · 永 井 裕 子 木 内 ふ み 子 · 斎 藤 洋 子 · 田 中 郁 子 石 川 悠 加
心不全患者の心理についての一考察	100
国立療養所岩木病院	五十嵐 勝 朗 · 工 藤 重 幸 · 下 山 庸 子 村 川 周 子 · 後 藤 睦 子 · 大 竹 進 毛 糠 英 治 · 塚 本 利 昭
塩酸メキシレチンの効果が如実に表れた Duchenne 型筋ジストロフィーの心不全例	103
国立療養所原病院	福 田 清 貴 · 石 瓶 紘 一
ヘリカルCTを用いた心胸郭比の測定	105
国立療養所川棚病院	渋 谷 統 寿 · 金 沢 一 · 田 村 拓 久

筋ジス病棟における入所措置・協議に関する調査	107
国立療養所西多賀病院	服部 彰 ・ 青木 勝彦 ・ 後藤 親彦 浅倉 次男
筋ジス成人患者の入退院に関する意識調査	112
国立療養所新潟病院	近藤 浩 ・ 藤田 富子 ・ 善積 恵子 荒川 富子 ・ 松浦 禎子 ・ 布施 洋子 近藤 悦子
療養環境について トイレの設備を考えるー	115
国立療養所南九州病院	福永 秀敏 ・ 山村 千広 ・ 乙須 待子 隈原 恵美子 ・ 濱田 啓子 ・ 池田 博美 柚木崎 愛子 ・ 十川 むつ子
My D患者の排便状況の調査から	118
国立療養所箱根病院	岡崎 隆 ・ 山崎 恵美子 ・ 片倉 洋子 清 淳子 ・ 川島 博彰 ・ 栗原 浩子 小田 光秀 ・ 桜井 延代 ・ 林 礼子 長前 キミ子
NIPPV使用による業務上の問題点とその対策	121
国立療養所岩木病院	五十嵐 勝朗 ・ 豊巻 政憲 ・ 長内 雪子 桑田 昭子 ・ 坂本 浩志 ・ 村川 周子
成人筋ジス病棟における看護体制を考える (第2報) ー介護に関する調査報告ー	123
国立療養所川棚病院	渋谷 統寿 ・ 安永 勝子
準夜帯における看護の実態と考察	126
国立療養所新潟病院	近藤 浩 ・ 曾田 弘子 ・ 細山 孝子 赤沢 冷子 ・ 山本 満子 ・ 林 利恵子 他13病棟スタッフ一同
夜間の体位交換を考える ーより良い睡眠のために時間毎体交を試みてー	130
国立療養所筑後病院	菰田 浩 ・ 古賀 燿子 ・ 井村 良子 平川 瞳 ・ 古賀 美帆子 ・ 金子 梅香 原 真紀 ・ 三根 澄代
筋ジストロフィー患者の観察室への移室の現況と課題	132
国立療養所西別府病院	後藤 晴美 ・ 森 景三 ・ 釘宮 仁美 伊崎 さゆり ・ 高井 由美 ・ 矢野 さよ子 後藤 勝政 ・ 村本 和子 ・ 黒川 徹 他病棟スタッフ一同
やりがいのある職場を考える	135
国立療養所下志津病院	川井 充 ・ 田中 春美 ・ 今村 つる 町野 次子 ・ 渡辺 陽子 ・ 金子 和子 佐藤 節子 ・ 折田 早苗

筋ジス病棟の魅力ある働きやすい職場づくりをめざして ー患者家族・看護婦の意識調査よりー	137
国立療養所南九州病院	福永秀敏・林キリ・濱田ひさ子 臼井久子・戎昌子・平田繁 柿木真美・田中テルミ・畠野明美 吉井奈美子
PMD看護量の検討(第4報) ータイムスタディに基づいてー	140
国立療養所長良病院	國枝篤郎・吉田雅子・桜井たつみ 中田喜佳子
PMD患者に適した看護度分類の検討(第1報)	142
国立療養所長良病院	國枝篤郎・桜井たつみ・吉田雅子 中田喜佳子
全国筋ジス病棟婦長の看護管理上の問題(第2報)	145
1)国立療養所長良病院	國枝篤郎 ¹⁾ ・中田喜佳子 ¹⁾ ・小谷美恵子 ²⁾
2)国立療養所東埼玉病院	
PMD病棟における看護過程の充実(第1報)	148
国立療養所長良病院	國枝篤郎・長屋しげみ・桜井たつみ 中田喜佳子
当病棟の業務を見直して	150
国立療養所再春荘病院	直江弘昭・上野ミヨノ・園田美穂 佐藤優子・廣田薫・山口恵子 中村浩美・中尾とよみ・秋山百美子
外泊患者へ夜間アラーム付きSaO ₂ モニタリングシステムを導入して	152
1)国立療養所八雲病院	南良二 ¹⁾ ・田中郁子 ¹⁾ ・石川悠加 ¹⁾
2)大同ほくさん(株)	田原裕滋 ³⁾ ・長谷川徹 ²⁾ ・藤谷英輔 ³⁾
医療関連商品開発部	志田勝広 ⁴⁾ ・武田光康 ⁵⁾
3)同 技術本部筑波研究所	
4)同 札幌本社医療関連部	
5)同 (株)道南支社開発グループ	
夜間の体位変換における一考察 ー睡眠に及ぼす影響を考慮してー	156
国立療養所刀根山病院	姜進・藤原直子・押切典子 齋藤施津子・竹山ひかる・宮崎とも子 増田紀子
ナースコールの改良 ーナースコール連動式ベッドランプを作成してー	159
国立療養所東埼玉病院	川城丈夫・松田茂喜・柴田美佐子 金子美知枝・栗野捷代・庄子寛子 出井由美・大畑みえ子

DMD末期患者の入浴時における重点的看護	161
国立療養所西多賀病院	服部 彰 ・ 八島 留美 ・ 平山 敬子 吉家 裕子
筋ジストロフィー病棟におけるMRSA感染症の実態と問題点	162
国立療養所下志津病院	川井 充 ・ 金子 和子 ・ 今村 つる 佐藤 節子 ・ 鹿島 廣幸 ・ 杉澤 ひろ子
入院児の長期外泊における問題点の把握（第2報） -介護者について-	164
国立療養所筑後病院	菰田 浩 ・ 赤峰 敏廣 ・ 笹熊 清香 木築 秀子
外泊時の日常生活をより快適に -外泊時の日常生活に関するアンケート調査を通して-	166
国立療養所川棚病院	渋谷 統寿 ・ 山崎 留美 ・ 三岳 ミチ子 渡邊 貴世 ・ 岸川 良子 ・ 濱野 佐枝子 藤下 敏 ・ 金沢 一
有目的有期限入院での進行性筋ジストロフィー患者への援助 -より良き在宅療養を願って-	168
国立療養所鈴鹿病院	高井 輝雄 ・ 矢田 宏子 ・ 久保 由美子 辻 清子 ・ 利藤 一子 ・ 森 美佐子 石河 洋子 ・ 村山 伸江
小児病棟における成人患者の生活時間帯の見直し -特に消灯時間について-	171
国立療養所西別府病院	後藤 晴美 ・ 宗 明美 ・ 岩井 泉 渡辺 由紀子 ・ 佐藤 由美子 ・ 植田 博子 黒川 徹 ・ 後藤 勝政 ・ 村本 和子
在宅療養・看護	
秋田県内における成人在宅患者の現状と今後の課題（第1報）	173
国立療養所道川病院	斎藤 浩太郎 ・ 時岡 栄三
山形県における集団検診について	176
国立療養所西多賀病院	服部 彰 ・ 浅倉 次男 ・ 鴻巣 武 佐久間 博明 ・ 五十嵐 俊光 ・ 後藤 親彦
千葉県における在宅患者の実態調査	179
国立療養所下志津病院	川井 充 ・ 関谷 智子 ・ 藤村 則子 石澤 真弓 ・ 神原 麻友巳 ・ 土佐 千秋 中川 祥子 ・ 東坂 敦子
在宅患児の学校教育における実態調査	181
国立療養所新潟病院	近藤 浩 ・ 戸次 義文 ・ 阿部 和俊
岐阜県下における在宅筋ジストロフィー患者の実態調査とニーズ	184
国立療養所長良病院	國枝 篤郎 ・ 大友 正明 ・ 長谷川 守

筋ジス在宅患者調査（１）	—医療面の実態—	188
国立療養所鈴鹿病院	高井輝雄・酒井素子・岡森正吾 岩井陽子・山田愛子	
筋ジス在宅患者調査（２）	—就学前後における保育・教育の実態—	190
国立療養所鈴鹿病院	高井輝雄・岩井陽子・酒井素子 岡森正吾・山田愛子	
筋ジス在宅患者調査（３）	—高等学校卒業後の進路実態—	193
国立療養所鈴鹿病院	高井輝雄・岡森正吾・酒井素子 岩井陽子・山田愛子	
在宅筋ジス患者の療養調査		195
1) 国立療養所刀根山病院	姜進 ¹⁾ ・野崎園子 ¹⁾ ・宮井一郎 ¹⁾	
2) 国立療養所青野原病院	松村剛 ¹⁾ ・四本木宣昭 ²⁾ ・岸本和男 ¹⁾ 西沢悦子 ¹⁾ ・久保田千恵 ¹⁾	
在宅筋ジス患者の訪問看護		198
国立療養所岩木病院	五十嵐勝朗・野沢省悟・長谷川広子 山内早苗・太田敏子・福士花江 後藤睦子・下山庸子	
訪問看護を通しての在宅呼吸管理	—呼吸管理チェックリストを作成して—	200
国立療養所鈴鹿病院	高井輝雄・小野妙子・野尻久雄 犬飼晃	
栄養・体力		
Duchenne型筋ジストロフィーの標準体位とエネルギー所要量	<共同研究>	203
1) 弘前大学医学部	木村恒 ¹⁾ ・浅井和子 ²⁾ ・中堤信子 ³⁾	
2) 国立療養所西別府病院		
3) 国立療養所西多賀病院		
国立療養所筋ジス栄養研究会		
肢帯型・顔面肩甲上腕型・Becker型筋ジストロフィーの標準体位とエネルギー所要量	<共同研究>	209
1) 弘前大学医学部	木村恒 ¹⁾ ・浅井和子 ²⁾ ・中堤信子 ³⁾	
2) 国立療養所西別府病院	国立療養所筋ジス栄養研究会	
3) 国立療養所西多賀病院		
先天性筋ジストロフィーの標準体位とエネルギー所要量	<共同研究>	217
1) 弘前大学医学部	木村恒 ¹⁾ ・浅井和子 ²⁾ ・中堤信子 ³⁾	
2) 国立療養所西別府病院	国立療養所筋ジス栄養研究会	
3) 国立療養所西多賀病院		
筋緊張性ジストロフィーの標準体位とエネルギー所要量	<共同研究>	222
1) 弘前大学医学部	木村恒 ¹⁾ ・浅井和子 ²⁾ ・中堤信子 ³⁾	
2) 国立療養所西別府病院	国立療養所筋ジス栄養研究会	
3) 国立療養所西多賀病院		

呼吸不全の食事基準 <共同研究>.....	226
国立療養所東埼玉病院 川 城 丈 夫	
国立療養所筋ジス栄養研究会	
DMD患者の心不全の食事管理について (第1報) <共同研究>.....	229
国立療養所宇多野病院 河 合 逸 雄 ・ 野 坂 雄 治 ・ 網 川 俊 伸	
吉 田 龍 平 ・ 望 月 龍 馬 ・ 内 藤 由 子	
国立療養所筋ジス栄養研究会	
NIPPV装着患者の摂食について	234
国立療養所鈴鹿病院 高 井 輝 雄 ・ 宮 崎 とし子 ・ 服 部 成 子	
三 谷 美 智 子	
嚥下困難な患者の喫食量検討と向上への試み	237
国立療養所刀根山病院 姜 進 ・ 三 輪 孝 士 ・ 岡 由美子	
藤 田 清 治 ・ 楠 田 昭 美 ・ 野 崎 園 子	
Duchenne型筋ジストロフィーの肥瘦度判定 <共同研究>.....	240
1) 弘前大学医学部 木 村 恒 ¹⁾ ・ 浅 井 和 子 ²⁾ ・ 中 堤 伸 子 ³⁾	
2) 国立療養所西別府病院	
3) 国立療養所西多賀病院	
国立療養所筋ジス栄養研究会	
貧血患者の実態について	243
国立療養所下志津病院 川 井 充 ・ 長 谷 川 輝 美 ・ 三 瓶 直 子	
齋 藤 真 人 子 ・ 佐 藤 厚 子	
新栄養所要量と現栄養指示量 (喫食量) との比較検討 (第1報)	246
国立療養所西別府病院 後 藤 晴 美 ・ 芳 賀 紀 美 子 ・ 浅 井 和 子	
春 田 典 子 ・ 保 美 智 子 ・ 最 所 正 義	
後 藤 勝 政 ・ 黒 川 徹	
筋ジストロフィーのビタミンD代謝	249
1) 弘前大学医学部 木 村 恒 ¹⁾ ・ 北 武 ¹⁾ ・ 早 狩 誠 ¹⁾	
2) 国立療養所原病院 三 好 和 雄 ²⁾	
Q O L	
PMD患者の交友関係について -合唱サークル活動を通して-	253
国立療養所西多賀病院 服 部 彰 ・ 田 代 裕 子	
怒声によって感情を表出する患者への対応について	257
国立療養所新潟病院 近 藤 浩 ・ 佐 藤 聖 子 ・ 安 田 弘	
大 橋 美 智 子 ・ 菊 間 明 子	
PMDの社会的側面より見たQOL -アンケートと面接を主として-	259
国立療養所宇多野病院 河 合 逸 雄 ・ 富 岡 由 之 ・ 松 本 浩 幸	
佐 野 る り 子 ・ 高 橋 邦 枝 ・ 山 崎 カ ヅ ヨ	

ボランティア活動に対する意識調査結果	262
国立療養所兵庫中央病院	陣内研二・龍見代志美・松本睦子 広野やす子
自閉症を伴うDMD児の言語理解の拡大	264
国立療養所南九州病院	福永秀敏・田中美代子
筋ジス病棟における行事を考える -行事について患者、家族、看護婦の実態調査を通して-	267
国立療養所原病院	稲岡宏重・烏田吉男・佐賀智子 田儀千代美・花田栄子・安田重久 椛島梅香・広中郁子・藤坂貴美子 山根豊子・福田清貴
QOLに関する意識調査結果 -筋ジストロフィーの病型別特徴-	270
国立療養所兵庫中央病院	陣内研二・山本正代・田原誠 鎌田光代・谷口由佳・清水絹代 小西妻恵・藤原節子
QOLに関する意識調査結果 -デュシェンヌ型筋ジストロフィー患者のステージ別特徴-	274
国立療養所兵庫中央病院	陣内研二・大崎和子・古川智恵子 品川寛子・松岡清子・芦田小夜子
小児・成人混合病棟におけるQOLを考える(その2)	278
国立療養所宮崎東病院	井上謙次郎・濱砂鈴子・横山由美子 仲地剛・高鳥シノブ・藤野親子 他3病棟スタッフ一同
成人患者の生きがい対策 -展示会開催を試みて-	281
国立療養所刀根山病院	姜進・段林可奈・小野久美子 内丸完子・渋谷典子・小山隆義 本山由美子・草野陽子
青年期における社会性獲得に向けての試み	283
国立療養所南九州病院	福永秀敏・狩川葉子・今村葉子 猪目美津子・福崎ルリ子
人工呼吸器(NIPPV)の定着にむけて -患者のQOLの拡大、外泊にむけて-	285
国立療養所西奈良病院	岩垣克己・安部桜子・平田昇 田中美幸・大藪定子・西原由紀子
気管切開患者のQOL向上をめざして -童話創作に取り組んで-	288
国立療養所再春荘病院	直江弘昭・松本明美・西島光江 矢津田三夫
人工呼吸器使用患者の生活行動拡大への援助	
-バッテリー、変圧器搭載のリクライニング式ストレッチャーを使用して-	290
国立療養所沖縄病院	大城盛夫・小橋川和江・村吉正子 平良ひとみ・小橋川英行

My D患者の生活をより充実させるために	293
国立療養所道川病院	齋藤 浩太郎 ・ 岩村 とし子 ・ 和田 良子 時岡 栄三
My D患者への精神的援助 -My D母子入院の事例を通して- (その2)	294
国立療養所長江病院	武田 弘 ・ 福井 まよみ ・ 奥田 恵子
精神発達の遅れを伴う筋ジス者のQOL	297
国立療養所長良病院	國枝 篤郎 ・ 平田 まさ子 ・ 中村 美代子
記録の充実をめざして -個人チェックリストの作成-	299
国立療養所再春荘病院	直江 弘昭 ・ 末竹 寛子 ・ 矢津田 三夫 西島 光江 ・ 大吉 さとみ ・ 松本 明美
先天性筋ジストロフィー患者の卒後指導 -手芸作業を試みて-	302
国立療養所西別府病院	後藤 晴美 ・ 甲斐 律子 ・ 西鶴 律子 守田 和正 ・ 後藤 勝政 ・ 黒川 徹
在宅成人者のQOL	305
国立療養所刀根山病院	姜 進 ・ 四本木 宣昭 ・ 西沢 悦子 久保田 千恵 ・ 岸本 和男 ・ 宮井 一郎 野崎 園子 ・ 松村 剛
筋ジストロフィー患者のパソコン通信によるQOLの改善	307
(社)日本筋ジストロフィー協会	貝谷 久宣 ・ 河端 静子 ・ 矢澤 健司 香西 智行 ・ 佐藤 隆雄 ・ 山田 栄吉 鈴木 敏明 ・ 城山 由比 ・ 岩本 節子 大平 隆 ・ 仲岡 紳行
筋ジストロフィー患者の地域社会への参加 -視覚障害者への朗読活動-	310
国立療養所筑後病院	菰田 浩 ・ 矢ヶ部 和代
長期入院患者への家族のかかわりを深めるために -日常生活援助の家族指導を行なって-	313
国立療養所宇多野病院	河合 逸雄 ・ 川中 美由生 ・ 小林 淳子 垣内 康秀 ・ 瀬津 幸重 ・ 河崎 壽子 西別府 加代美 ・ 久保田 和美 ・ 藤田 里香 小柳 薫 ・ 渡辺 和代 ・ 光吉 出
人生の浮沈に関する意識調査 -Duchenne型PMD患者の場合-	315
国立療養所東埼玉病院	川城 丈夫 ・ 佐藤 智恵子 ・ 風間 忠道
筋ジス患児の高校卒業後の取組みについて (第3報)	319
国立療養所宮崎東病院	井上 謙次郎 ・ 中武 孝二 ・ 長嶺 道明 仲地 剛 ・ 吉原 明子 ・ 榎木 誠一 藤野 親子 ・ 杉尾 直子

歩行状態の分析から考えた機能維持 —外泊の多い歩行児への取り組み— 321

国立療養所宇多野病院 河合逸雄・耕納美紀・畑裕子
小路知子・溝川幸枝・高川宜子
小林あつ子・杉本民枝・尾上益三
田中章子・光吉出
他1-2病棟スタッフ一同

リハビリ I (理学・作業療法)

筋ジストロフィーの運動機能評価法に関する研究 (第3報) MMT <共同研究> 325

- 1) 国立療養所西多賀病院 服部彰¹⁾・五十嵐俊光¹⁾・渡部昭吉¹⁾
- 2) 国立療養所岩木病院 三浦幸一¹⁾・秋山裕美¹⁾・塚本利昭²⁾
- 3) 国立療養所道川病院 宇野光人²⁾・伊藤伸³⁾・石川玲⁴⁾
- 4) 弘前大学医療技術短期大学部 藤島恵喜蔵⁵⁾・加賀谷芳夫⁵⁾・高橋とみ子⁵⁾
理学療法学科 高野周子⁵⁾・水島善四郎⁶⁾・田中朋子⁶⁾
- 5) 国立療養所八雲病院 大山由紀⁶⁾・佐藤淳一⁶⁾
- 6) 国立療養所西札幌病院 (北海道・東北ブロック)

筋ジストロフィーの運動機能評価法に関する研究 (第3報) ステージ分類 <共同研究> 328

国立療養所東埼玉病院 川城丈夫・浅野賢・近藤隆春
(協力施設)

国立療養所東埼玉病院・下志津病院・新潟病院・箱根病院・国立精神・神経センター

筋ジストロフィーの運動機能評価法に関する研究 (第3報) ADLテスト <共同研究> 330

- 1) 国立療養所下志津病院 藤村則子¹⁾・土佐千秋¹⁾・浅野賢²⁾
- 2) 国立療養所東埼玉病院 近藤隆春³⁾・川井充¹⁾
- 3) 国立療養所新潟病院
(協力施設)

国立療養所下志津病院・東埼玉病院・新潟病院・箱根病院・国立精神・神経センター

筋ジストロフィーの運動機能評価法に関する研究 (第3報) 動作分析 <共同研究> 333

- 1) 国立療養所再春荘病院 直江弘昭¹⁾・弥山芳之¹⁾・幸福圭子²⁾
- 2) 鹿児島大学医療技術短期大学部
(協力施設)

国立療養所筑後病院・川棚病院・再春荘病院・西別府病院・宮崎東病院・南九州病院・沖縄病院・
鹿児島大学医療技術短期大学部

筋ジストロフィーの運動機能評価法に関する研究 (第3報) ROMテスト <共同研究> 337

- 1) 国立療養所刀根山病院 姜進¹⁾・植田能茂¹⁾・武田純子²⁾
- 2) 国立療養所徳島病院
(協力施設)

国立療養所兵庫中央病院・宇多野病院・医王病院・長良病院・鈴鹿病院・西奈良病院・
松江病院・原病院

筋ジストロフィー患者の上肢機能の推移 –データベースからの分析–	344
1) 国立療養所南九州病院 福永秀敏 ¹⁾ ・今村克彦 ¹⁾ ・幸福圭子 ²⁾	
2) 鹿児島大学医療技術短期大学部	
車椅子から電動車椅子への移行の時期.....	347
国立療養所南九州病院 福永秀敏・森高紀義・吉永隆一郎	
DMDにおける運動負荷と呼吸・循環指標 –関節運動を中心に–	349
1) 国立療養所岩木病院 五十嵐勝朗 ¹⁾ ・塚本利昭 ¹⁾ ・高橋真 ¹⁾	
2) 弘前大学医療技術短期大学部 宇野光人 ¹⁾ ・山田誠治 ¹⁾ ・大竹進 ¹⁾	
理学療法学科 毛糠英治 ¹⁾ ・石川玲 ²⁾	
夏期外泊中のずり這い訓練指導	353
国立療養所鈴鹿病院 高井輝雄・堂前裕二・宮城秀一	
広森和代・後藤基・小長谷正明	
DMDにおける運動負荷と呼吸・循環指標 –日差変動について–	357
1) 国立療養所岩木病院 五十嵐勝朗 ¹⁾ ・高橋真 ¹⁾ ・塚本利昭 ¹⁾	
2) 弘前大学医療技術短期大学部 宇野光人 ¹⁾ ・大竹進 ¹⁾ ・毛糠英治 ¹⁾	
理学療法学科 山田誠治 ¹⁾ ・石川玲 ²⁾	
呼吸訓練への取り組みについて	360
国立療養所松江病院 武田弘・加藤直子・安食克志	
当院における呼吸訓練の現状と課題	362
国立療養所西別府病院 後藤晴美・黒川徹・後藤勝政	
広田美江・見越一男・梶原秀明	
亀井隆弘・鶴崎文子	
DMDにおける運動負荷と呼吸・循環指標 –呼吸運動を中心に–	365
1) 国立療養所岩木病院 五十嵐勝朗 ¹⁾ ・宇野光人 ¹⁾ ・高橋真 ¹⁾	
2) 弘前大学医療技術短期大学部 塚本利昭 ¹⁾ ・山田誠治 ¹⁾ ・大竹進 ¹⁾	
理学療法学科 毛糠英治 ¹⁾ ・石川玲 ²⁾	
呼吸筋疲労の評価の試み	369
1) 国立療養所岩木病院 五十嵐勝朗 ¹⁾ ・石川玲 ²⁾ ・塚本利昭 ¹⁾	
2) 弘前大学医療技術短期大学部 宇野光人 ¹⁾ ・高橋真 ¹⁾ ・山田誠治 ¹⁾	
理学療法学科 毛糠英治 ¹⁾ ・大竹進 ¹⁾	
過度の腰椎前彎を来す顔面肩甲上腕型における体幹装具の試作	371
国立療養所医王病院 本家一也・藤井信好・喜多加世子	
顔面肩甲上腕型における体幹装具使用の経過	374
国立療養所医王病院 本家一也・喜多加世子・藤井信好	
筋緊張性ジストロフィー患者の筋力低下のパターン	377
国立療養所道川病院 斎藤浩太郎・伊藤伸	

DMDの体表からみた脊柱弯曲の形態学的評価	379
国立療養所徳島病院	松家 豊 ・ 武田 純子 ・ 齋藤 孝子 白井 陽一郎
DMDの身長とアームスパンとの関係について (第1報)	382
国立療養所西多賀病院	服部 彰 ・ 渡部 昭吉 ・ 五十嵐 俊光 三浦 幸一 ・ 根立 千秋 ・ 穴戸 勝枝 国井 光雄
PMD下肢装具療法 - 28年間の実績 -	384
国立療養所徳島病院	松家 豊 ・ 白井 陽一郎 ・ 武田 純子 齋藤 孝子
リハビリⅡ (機器)	
筋ジストロフィー患者の移乗に関する研究 - 手動式車椅子とトランスファーボード -	389
国立療養所西多賀病院	服部 彰 ・ 根立 千秋 ・ 五十嵐 俊光
筋ジストロフィー患者の旅行用排便台の作製	392
国立療養所筑後病院	菰田 浩 ・ 福山 高彦 ・ 井村 良子 河野 晴美 ・ 田島 恵子 ・ 橋本 京子 宮崎 ひろみ
手動車椅子上での変形予防の工夫	395
国立療養所原病院	福田 清貴 ・ 原田 敏昭 ・ 中路 暁美 浦上 由美子 ・ 江崎 義彦
PMD患者への座位保持装置 (ピンドット・シーティング・システム) の試み	398
国立療養所川棚病院	渋谷 統寿 ・ 中川 真吾 ・ 藤下 敏 金沢 一
多様入力コントローラーの開発	401
1) 国立療養所新潟病院	近藤 浩 ¹⁾ ・ 広瀬 一郎 ²⁾ ・ 米田 郁夫 ²⁾
2) 東京都補装具研究所	鈴木 実 ²⁾ ・ 橋詰 努 ²⁾ ・ 藤記 拓也 ²⁾ 川合 秀雄 ²⁾
多様入力コントローラーの臨床試用 - タッチセンサーによる3入力駆動方式 -	404
国立療養所新潟病院	近藤 浩 ・ 近藤 隆春 ・ 猪爪 陽子 小湊 国雄
筋ジストロフィー患者に適した木彫用具の開発および改良	407
国立療養所徳島病院	松家 豊 ・ 早田 正則 ・ 川合 恒雄

病態・その他

DMD患児における知能障害と身長との関連性	411
国立療養所医王病院	本 家 一 也 ・ 園 井 雅 子 ・ 中 村 真 理 子 井 表 則 征 ・ 北 原 美 津 子 ・ 新 宮 貴 子 堀 田 外 志 子 ・ 原 田 裕 子
CMD患児の知能の縦断的研究(その2)	413
1)国立療養所松江病院	武 田 弘 ¹⁾ ・ 黒 田 憲 二 ²⁾ ・ 福 井 まよみ ¹⁾
2)国立療養所西鳥取病院	永 田 美 恵 子 ¹⁾ ・ 寺 本 昌 子 ¹⁾
国立療養所関連DMD双生児の全国調査検討(第4報)	415
国立療養所鈴鹿病院	高 井 輝 雄
筋ジス患者とボランティア活動 <共同研究>	417
1)国立療養所長良病院	長谷川 守 ¹⁾ ・ 大 友 正 明 ¹⁾ ・ 野 尻 久 雄 ²⁾
2)国立療養所鈴鹿病院	浅 倉 次 男 ³⁾ ・ 横 井 行 雄 ⁴⁾ ・ 池 田 庸 子 ⁵⁾
3)国立療養所西多賀病院	富 岡 由 之 ⁶⁾ ・ 松 永 萬 理 ⁷⁾ ・ 今 村 葉 子 ⁸⁾
4)国立療養所下志津病院	岩 下 宏 ⁹⁾
5)国立療養所箱根病院	
6)国立療養所宇多野病院	
7)国立療養所松江病院	
8)国立療養所南九州病院	
9)国立療養所筑後病院	
全国児童指導員協議会筋ジス部会	
ボランティア定着に向けて(続報)	420
国立療養所下志津病院	川 井 充 ・ 貝 塚 房 代 ・ 石 田 征 子 中 島 和 子 ・ 門 井 孝 子 ・ 小 原 志 保 美 横 井 行 雄 ・ 杉 山 浩 志
寝たきり患者と中・高校生ボランティアとの交流を試みて	423
国立療養所沖縄病院	大 城 盛 夫 ・ 宮 城 好 子 ・ 宮 城 愛 子 長 浜 勝 治 ・ 浜 田 作 美
核磁気共鳴装置による筋疾患の脳ならびに筋の病態の解析	
ー福山型先天性筋ジストロフィーについてー	426
国立精神・神経センター	
小児神経科	花 岡 繁
筋ジストロフィー患者における交感神経皮膚血流反応	428
国立療養所西多賀病院	服 部 彰 ・ 嶋 崎 茂 ・ 佐 久 間 博 明 小 野 勝 彦

ワークショップ

平成5年7月22日 日本都市センター第2講堂

I. 筋ジストロフィーの療護に関する研究の現状と今後の課題

座長 国立療養所筑後病院	岩 下 宏	
入院療養・看護	431
国立療養所南九州病院	福 永 秀 敏	
在宅療養・看護	450
国立療養所刀根山病院	姜 進	
栄養・体力	455
弘前大学医学部公衆衛生学	木 村 恒	
Q O L	457
国立療養所宇多野病院	河 合 逸 雄	
リハビリ I (理学・作業療法)	458
国立療養所徳島病院	松 家 豊	
リハビリ II (機器)	459
国立療養所西多賀病院	服 部 彰	
II. 特別講演：筋ジストロフィー患者のQ O L		
患者・家族の立場から	469
座長 国立療養所宇多野病院	河 合 逸 雄	
演者 (社)日本筋ジストロフィー協会	河 端 静 子	
班員名簿	474

筋ジストロフィーの療養と看護に関する臨床的、社会学的研究

主任研究者 岩 下 宏

筋ジストロフィー患者の療養と看護に関する研究を多職種により実施し、わが国における筋ジストロフィー患者の医療・福祉・QOLの向上を目指すことを本研究の目的としている。

本研究班は長らく継続されてきた厚生省筋ジストロフィー研究のいわゆる療護班を引き継ぐものであるが、本研究班の目標・方針として、改めて

- ・筋ジストロフィー患者のベッドサイドに直接関係したテーマを研究
- ・モデル的な多職種による研究
- ・患者の多様化するニーズに対応した研究
- ・患者のQOLを高める研究
- ・積み重ねてゆける研究
- ・筋ジストロフィー研究第4班の過去の膨大な研究成果を活用した研究

を掲げることにした。この方針により、本年度は主任研究者1、分担研究者28、顧問2、計31名による新たな編成を行い、表1に示す7分科会・リーダーを決めた。また、各分科会に共同研究テーマを作成して従来の筋ジストロフィー研究療護班における研究テーマの整理・総合化を計画した。

さらに、本年度は3年間の予定で発足した初年度であるため、ワークショップ「筋ジストロフィーの療養に関する研究の現状と今後の課題」および「筋ジストロフィー患者のQOL－患者・家族の立場から」を開催、上記各分科会リーダーおよび特別講師が講演し、本研究班の現時点における筋ジストロフィー研究の問題点を整理した。

上記したごとく、本研究班では多職種によって実施される研究であるため、班会議（平成5年12月2、3日、日本都市センター）で発表される演題数は133題の多さを数えた。本報告書は本年度のこの研究成果とワークショップ（平成5年7月22日、日本都市センター）記録を集録したものである。

各分科会における研究成果が各分科会リーダーによって詳細に述べられているので、ここではその概略を記すにとどめたい。

1. 入院療養・看護

7分科会中最多の49題が発表されたことでも分かる通り、本研究班における研究を遂行するスタッフ（主として看護婦）は、本分科会に最も多く深く関係している。近年、デュシェンヌ型筋ジストロフィーを初めとする筋ジストロフィー患者における呼吸不全の治療法として、マスク使用によるNIPPVが導入されているが、その欠点である鼻根部潰瘍防止対策が研究された点が注目される。筋ジストロフィー患者のターミナル期における呼吸不全対策は、患者の療養と看護に関する最大問題点の一つであるので、今後ともより良い工夫研究が必要である。

筋ジストロフィー病棟における業務見直しに関する研究もマンパワーと関連しているだけに注目を集めている。入院患者にとってばかりでなく、病棟で働く職員にとってもより快適な業務ないし病棟運営のあり方なども検討されている。患者、職員の双方にとってより高い快適性が求められることは当然であるが、両者の快適性はしばしば相反することもありうるので、今後とも多面的な検討が期待される。

2. 在宅療養・看護

在宅筋ジストロフィー患者の実態調査ならびに支援のあり方などの研究も長年実施されてきたが、特に支援のあり方は近年ますます重要視されてきた。

実態調査では、在宅患者の急変時対応への不安、リハビリ不足等が繰り返し指摘される一方、最近8年間で受療行動・教育環境の改善も報告されている。

国立療養所は、慢性疾患を主な対象としている関係で平成6年度からモデル施設を指定して在宅ケアへ取り組むこととなっている。筋ジストロフィーに関しては、当研究班がその先駆的役割を果たしており、当研究班の研究成果も踏まえつつ実施されることが期待される。

3. 栄養・体力

当分科会では、(1)病型別標準体重とエネルギー所要量、(2)呼吸不全・心不全の栄養、(3)肥満・貧血・便秘の実態とその対策、(4)行事食が共同研究

とされ、本年度12題の研究発表があった。

筋ジス患者の栄養問題は、コントロール研究（例えば高蛋白食群と低蛋白食群における病状の進行度、体力の比較研究など）が困難であるため、いかなる栄養法が最良かなど不明な点が多いと考えられる。しかし、木村恒リーダーにより筋ジス患者における種々の栄養・体力に関する研究が続けられている。近年は多施設の栄養士も直接参加する実際的な共同研究が多くなっている点は良い傾向と考えられる。

4. QOL

根本的な治療法のない筋ジス患者にとっては、患者のQOLを高める研究が最も重要と言って過言ではない。また、当研究班においては、ほとんど全ての研究がQOLに直接関連しているとも言える。しかし、当研究班では特別にQOL分科会をつくり、QOLに特に焦点を当てて研究することにした。本年度は、筋ジス患者に適したQOL、社会面からみたQOL、在宅患者のQOL、デュシェンヌ型以外の病型におけるQOLなど、26題の研究発表があった。

QOLの概念の取らえ方が各人により異なることもあるため、筋ジス患者におけるQOL研究は基本に立ち帰って、その概念を整理しながら研究する必要があると考えられる。

5. 理学療法・作業療法

運動機器評価法に関する研究が共同研究テーマであり、各個研究も含めて20題が発表された。筋力評価、関節可動域評価、ADLテスト、動作分析、運動機能障害度などを地区毎に分担し、松家豊院長をリーダーとしてPT、OTらにより共同研究された。

各個研究では、上肢機能、脊柱変形評価、装具療法の変遷その他が発表された。

6. 機器

共同研究テーマ「移動機器の工夫」に関して7題が発表された。機器により、筋ジス患者がベッド・車椅子から他所へ移動できるならば、QOL向上へつながる。移動するための車椅子・旅行用便器の工夫・新作などが発表されたが、これらが1施設のみではなく、他施設でも応用可能かなど、積み重ねによる検討も今後必要と考えられる。

7. 病態・その他

当分科会は、上記1～6分科会に入らないテーマを研究することとなっている。当分科会の共同研究テーマとして「筋ジス患者と人的ネットワーク」が取り上げられ、3題の発表があった。

知能障害、一卵性双生児、下肢冷感の研究なども発表された。

尚、「筋ジストロフィー」総合班会議（平成6年1月25日、日本都市センター）では、当研究班から下記の発表を行った。

- 1) 第4班における筋ジストロフィー研究のすすめ方
岩下 宏（国療筑後病院）
- 2) 筋ジストロフィー患者の運動機能評価
松家 豊（国療徳島病院）
- 3) 筋ジストロフィー患者の在宅ケア：最近の問題点
姜 進（国療刀根山病院）

以上、本年度は従来の厚生省筋ジス研究第4班（療護班）の整理・総合化を計画、共同研究テーマを設定し、133題の研究成果が発表された。

従来の研究業績との比較検討などの点で、まだ研究改善の余地を残しているが、本研究班は筋ジス患者のQOL向上を目指している点極めて重要、有益と考えられるので、次年度より良い研究を遂行できるよう努力したい。

表1 平成5年度筋ジス研究第4班 分科会・リーダー・共同研究テーマ

分科会	リーダー	共同研究テーマ
1. 入院療養・看護	福永秀敏(南九州)	①呼吸不全対策と今後の課題 ②心不全の看護と治療 ③筋ジス病棟の将来展望 (看護業務, 機器整備, 病棟改築, 在宅ケアとの関係)
2. 在宅療養・看護	姜進(刀根山)	①在宅患者の実態調査 ②施設ケアと在宅ケアのシステム化 ③ショートステイ
3. 栄養・体力	木村恒(弘前大)	①標準体重 ②呼吸不全・心不全の栄養 ③肥満・貧血・便秘の実態とその対策 ④行事食
4. QOL	河合逸雄(宇多野)	①対人関係からみたQOL ②筋ジストロフィー患者に適したQOL
5. リハビリⅠ 理学・作業療法	松家豊(徳島)	①筋ジストロフィーの運動機能評価法に関する研究
6. リハビリⅡ 機器	服部彰(西多賀)	①移動機器の工夫
7. 病態・その他	岩下宏(筑後)	①筋ジス患者と人的ネットワーク

「入院療養・看護」のまとめ

国立療養所南九州病院 福永秀敏

筋ジス第4班の分科会のなかでも、「入院療養・看護」の部門が最も患者の療養生活に直結した研究を担当しており、本年度も49題という多数の演題が発表された。そこで3つの共同研究テーマ別に要約する。

1. 呼吸不全対策と今後の課題

Duchenne型筋ジストロフィー（DMD）は勿論のこと、筋緊張性ジストロフィー（MyD）など呼吸筋を障害する神経筋疾患では、進行に伴う呼吸障害は避けえないものである。そこで日本では昭和60年以降、全国の筋ジス病棟で、DMD患者などを主対象にした種々の呼吸不全対策が試みられてきた。当初は体外式陰圧人工呼吸器（CR）と気管切開による陽圧式人工呼吸器が主流であり、その装着基準、装着方法、効果、看護度、QOLなどについて様々な角度から検討がなされた。ところがここ2、3年、NIPPVが導入され効果、患者の快適性、看護度において気切やCRより優れている点も多いことからNIPPVについての研究が増えてきている。

まず、NIPPVについて適応と開始時期の研究では、患者への導入をスムーズにするためしおりやビデオの作成（再春荘）、気切との比較という視点から患者への意識調査（川棚）、夜間カプノグラフィオキシメーターによる夜間の呼吸不全重症度を考慮した開始時期の検討（八雲）がなされた。CRとの比較では、体位変換が可能、排泄が自由にできる、日常生活の規制が少ないことなどが利点として挙げられている（再春荘）。一方気切との比較では患者の不安が少なく導入しやすく、切開創がなく声が出せ、外見が良くより安楽である（川棚）点が指摘されている。開始時期は昼間のPaCO₂が60mmHg以上、昼間のPaCO₂が50mmHg以上で夜間終末呼気CO₂平均値が60mmHg以上、SaO₂が90%以下になる時間の割合が20%以上で、夜間呼吸不全症状を認める時期が開始時期として提案された（八雲）。

NIPPVの欠点として、鼻腔や口腔を経て陽圧の空気を肺に送るため、マスクの患者顔面への圧迫が最も大きな問題となる。そのため鼻マスク

での鼻根部潰瘍、はん痕化防止のため、アムコ社製鼻プラグの代用（八雲）、自家製鼻マスク作成（西多賀、鈴鹿）の工夫が紹介されたが、今後気密性を確保しながら長期間使用可能で快適度の高いマスクの工夫が求められる。また気管切開下IPPVからNIPPVへの移行により、患者の身体的状況の改善やQOLの拡大された例（八雲）、CR呼吸器装着患者のQOL拡大の試み（東埼玉）、パソコンの導入（徳島）、旧式のCRに変わるCR-33の変更により延命している例（東埼玉）、肺梗塞例（東埼玉）が発表された。徳島からCRの長期追跡による検討、下志津から過去9年間の呼吸器装着患者の動向や経営改善問題も念頭においた課題が提起された。この問題は今後、呼吸管理の方法や呼吸器の選択をどうするか、限られた人員の中でどこまで呼吸器装着が可能かなど全国のどの筋ジス病棟でも近い将来直面する最も厳しい課題といえる。

また、MyDに関して、筋ジス病棟への入院患者数が増加していることもあり研究発表も増加している。今年度もMyD呼吸不全Ⅱ、Ⅲ期の看護基準の作成（松江）、嚥下障害と呼吸障害との関連（道川）、テオフィリンの効果（医王）が発表された。

2. 心不全の看護と治療

心不全の共同研究テーマでは、治療に関して4題、検査方法1題、QOL2題であった。昨年より川棚の渋谷を中心に、DMD心不全例に対するACE阻害剤の治験が開始されているが、今回その一部が発表され有用性と延命効果について言及された。全国アンケート方式での調査では、captopril 8例、enalapril 7例で、両者含めた改善例は13例で、2例が不変であった（川棚）。またDMD心不全に、digoxinや利尿剤、ACE阻害剤に加えてβ遮断薬の併用により重篤な心不全症状の悪化がなく1年間継続投与が可能で諸検査値も改善した症例（八雲）、塩酸メキシレチンの効果（原）、心機能に対する呼吸不全の影響とcaptoprilの効果（南九州）も報告された。また心胸郭比を測定するため、ヘリカルCTによる胸郭、